

精霊はどのように「知られる」のか

ラオス山地民社会における精霊

徳安祐子(九州大学大学院人間環境学府)

本発表では、ラオス中南部の山地に住むモンクメール系民族カタンの人びとの、精霊に関する知のあり方について検討する。

本発表は、カタンの一村落、N村において2006年までに断続的に実施された、通算約10ヶ月間のフィールドワークに主に基づいている。カタンは、ラオスで一般的に用いられてきた、高地民、山地民、低地民という分類の中では山地民とされ、低地のラオ人たちよりも先住の民だと考えられている。村に安定した現金収入はなく、換金作物もつくっていない。自家消費のための耕作はおこなうが、多くの食物を村周辺の森から得ており、森と密接な関係を持って暮らしている。村に仏教の影響はほとんど及んでおらず、村のなかや森のなかに、多様な精霊の存在を認めている。

精霊たちは、時に人びとに病気などの災厄をもたらす。村々には、それに対応するためのモーと呼ばれる呪医が数人存在する。呪医たちは、一般の人びとに比べ、精霊に関する豊富な知識を有し、病気治療のための儀礼をおこなう。村には、こういった呪医のほかに、長老や、村の精霊の司祭が特権的な知を運用する者として存在する(した)。各家の家長もまた、それぞれの家に祀られている家の精霊の司祭としての役割を担う。精霊に関する知識や実践は、職能者に独占されるものもあれば、家長などの一般住民に近い人びとにまで開かれたものもある。精霊に関する知識は、村のなかで偏在しつつ、かつ広く布置されているといえる。

本発表でとくに取り上げたいのは、精霊と濃厚に接触したり、直接に交渉をおこなったりしない、一般の村人が、精霊についてどのように「知る」のかということである。呪医は、病気治療にあたって、精霊が病因であるかどうかを判定し、精霊が病因であれば、その精霊を特定して、病人を回復させるよう精霊と交渉をする。しかし、病人が回復した後で、供犠を伴う儀礼をおこなうのは、通常、家長であり、一般の村人である。村の人びとは、儀礼に参加し、儀礼のなかで精霊への呼びかけを手伝い、あるいはそれを見聞きすることで、精霊について一定の知識を得、ときにはそれを運用する。また、呪医は通常、どの精霊が病因となったかという判定をおこなっても、その精霊を怒らせた原因については言及しない。村の人びとは、それを、儀礼において精霊との関係を修復するためのやりとりのなかで探っていくのである。儀礼の中心的な参加者になることのできない女性であっても、当事者に近い人物であれば、その儀礼のなかでおこなわれる原因探しを見守り、ときには、それとは別に、独自に原因を探ることもある。それが可能なまでに、人びとは精霊について「知っている」ということができるだろう。精霊についての人びとの知識は、硬直した慣習としても表われるが、同時に、柔軟で豊かな、個々の精霊たちに付随するエピソードや付与されたキャラクターとしても表われる。村の人びとは精霊を過去の出来事によって記憶し、それによって精霊には一種の「人格」のようなものが付与される。そして、その付与された個々の精霊の「人格」のようなものは、精霊によって病気などが引き起こされたとき、こんどはその原因を推測する手がかりとなる。この過程のなかで、精霊は、人びとにとって具体的な存在として立ち現われる。また、村の人たちは、呪医を介さずとも、何かが起きたときに、それが精霊によるものかどうかを自ら判断することもあるし、呪医を介さずに治療儀礼をおこなうことすらある。それが可能だと、村の人びとは考えているのである。このような、精霊に関する知が村の多くの人びとに行き渡っているのはなぜなのだろうか。このような知は人びとにどのように獲得され、運用されるのであろうか。

村のなかで流通する精霊に関する知識や実践は、先鋭化し、職能者によって独占され、互いに秘匿しあうようなものとして扱われることもある。またあるときには、硬直し、慣習化され、人びとの間で伝承されるようなものにもなる。このなかで、村の一般の人びと、精霊についての知識や実践に特に強くコミットすることのない、平均的な住民は、精霊に対してどのような実践をおこない、あるいは知をもって日々を送っているのだろうか。このことについて、フィールドで得られた知見をもとに検討したい。

【 ラオス、山地ラオ、精霊、知、身体 】